

7月28日(金) 10:00~11:00 第20 松山全日空ホテル 南館4F エメラルド
医療と看護介護7 [座長] 村上 桃子 (介護老人保健施設さざんか)

第1群: 101 入所

第2群: 204 工夫・新たな取り組み

第3群: C3308 医療と看護介護 ターミナルケア

看取りケア導入における職員のストレスコーピング過程 看取りケア研修プログラムの効果

介護老人保健施設 プライムケア 桃花林

高谷 美智子

看取りケアを行うにあたり、職員のストレス（不安）をチャレンジ（挑戦）へ、そして「適応」に至る介入を模索した。職員がどう感じ、どう考え適応していったか、看取りケア研修プログラムの介入の効果について。

【はじめに】

フロアで新しい取り組みを始めることは、職員のやる気を引き出すことにもなるが同時にストレスにつながることもある。ストレスはその事柄がどのように解釈されるかによって意味合いが変わってくる。ラザルスのストレスコーピング理論によれば、適切な対処（以下コーピングとする）がされることで「適応」に至ることが示されている。

今回、看取りケアを行なうことになり職員は「不安」というような否定的情動を持っていた。そこでコーピングとして「看取りケア」に対する施設マニュアルの勉強会を委員会が中心となって行った。内容が具体的でありコーピングとしては有効な介入であった。さらに、同時期に看取りケアの対象となった利用者もおり学んだことがすぐ活かしたという状況もあった。

これらのことから、看取りケア導入にあたり職員がどう感じ、どう考え適応して行ったかの報告を行う。

【目的】

看取りケアを導入するにあたり、職員のストレスを軽減する有効な介入を模索する。

【対象・方法】

1)認知症専門棟フロア職員 15名

2)下記の時期にアンケートを行なう

(認知的評価)看取りケアを行うと決まってからの時期

(1回目の評価)看取り研修の全プログラム（以下勉強会）に全員が参加した後

(2回目の評価)実際に看取りケアに携わって

【倫理的配慮】

研究を進めるにあたり、職員及び看取り対象者の家族に口頭にてその趣旨・内容を説明し、情報を研究以外に使用しないことを約束し承諾を得る。

【結果】

(認知的評価) 看取りケアを行うと決まってからの時期

看取りに対して不安・看取りケアとはどのようなケアなのか、マニュアルが完成していないのに大丈夫なのか、病院と違う対応はどのようにするのか、医師の体制は夜間でも大丈夫なのか、どのタイミングで部屋を移動してモニターをつけ医師・家族へ連絡するのか、極力なら実施したくない。また、看取りケアの環境が整っているのか、死後処置（エンゼルケア）はどのようにす

るのか、いざ亡くなった時に他の利用者の見守りや対応は大丈夫なのか、看取りの条件が知りたい、一連の動きが知りたいという意見があった。他には、本人の今までの背景がわからず、どういったことをすれば「看取れた」という形になるのか、家族に失礼に当たることをしてしまうのではないかという不安など、15名のうち13名は不安と感じていた。他2名のうち、歯科衛生士は発熱による脱水がおこると唇・口腔内が乾燥するため保湿剤が必要、他フロアの歯科衛生士と連携し毎日口腔ケアができるようにしたい、勉強会も考えている。もう一人は、本人・家族が最期の日を迎えたときに、桃花林でよかったと思ってもらえる関わり方をしていきたい、とチャレンジと捉える職員がいた。

(1回目の評価) 看取り研修の全プログラムに全員が参加した後

看取り計画書などの書類に関して心配である、周知や勉強会を通して流れや手順を知ることができたがエンゼルケアに立ち会うときに指示通りにできるか不安、頭の中では理解されても実際は臨終のときに当たりたくないと思っているのではないかと、不安は少なくなったが十分に関わっているのかと考えてしまう、と15名のうち4名は不安を抱えていた。他には、勉強することで有り難い時間を与えられている、不安は少なくなった、他フロアの体験談を聞きイメージができた、勉強会で聞いた内容と本人の状態を重ね合わせて状態をみられるようになった、毎日少しでも多く関わって状態に合わせた対応を心がけたい、その利用者様らしく看取るとはどうすることなのか他職員の意見も聞きたい、今の段階では心に少し余裕を持って接することができる、という結果だった。

(2回目の評価) 実際に看取りケアに携わって

以前よりも顔を見て声をかけたりコミュニケーションを多くとるようになった、看取りへの感じ方が変わった、意欲的に行おうとする気持ちが出てきたように感じる、勉強会で知った情報や上司の言葉で不安や怖いという感情は緩和された、状態に合わせて職員同士の連携を取りながら適切なケアをしていきたい、いろいろと情報収集できる時間があったので落ち着いて接している、顔や手に触れたり声掛けを意識して少しでも異変がないか観察している、という結果だった。どのような対応をしたいか?という質問を認知的評価時と2回目の評価で問うた結果、声掛けをしていきたい、痛みや苦痛がないようにしたい、無理なく清潔は保ってあげたい、と共通している部分があったが、2回目の評価では声掛けと同時に手を握ってあげる、体をさすって触れてあげたいや最期まで笑顔が見たいという直接的な関わりに変化していた。

【考察】

「看取り」という、いつ起こるかかわからない時間的な不確実性がストレスを大きくしたと考えられる。勉強会のプログラム内容が具体的であったことが、対象者の状態と重ね合わせて理解を深めることができ実践することができた。看取りのイメージができたことがストレスの軽減につながり、チャレンジする意欲に繋がったと考える。また、全職員が同じ知識を持つことでお互いに意見交換しやすくなり、本人の状態を受け入れ適切な対応ができるようになった。つまり、勉強会を通して上手くコーピングが繰り返され、職員全員が「適応」に至ったと考える。

【まとめ】

その都度起こる事柄に対して、同じ知識を持った職員同士話し合いをすることでストレスを軽減していた。知識があることで話し合いができることが更なるコーピングにつながった。

【おわりに】

K氏：女性 95歳永眠。

家族から「母は、ろうそくの芯まで燃えつきました。桃花林でよかった、ありがとうございました。」とっていただけことが私達の誇りとなった。